



16世紀初頭、世界情勢の大きな波に乗り、瞬く間に大国へのし上がったスペインは、絶大な富を有していた。向かうところ敵なしの王者は、海をも征服する勢いだった。何度も南アメリカ大陸と往復している内に、最短の航路を見出したスペインは、今日ものんびりした船旅を満喫していた。

海上では天候を始め、多少の狂いで悲惨な目にあうことは、骨身に染みて分かっている。

それでも、安定の航路は安全と引き換えに、退屈が付いて回る。

360度を海に囲まれ、島影すら見えない場所で、退屈を余していたスペインは、甲板に寝転がったまま、ぼんやりしていた。

日程的にはまだまだ先は長く、暇を持て余すあまり、何か起こらないか期待してしまいうくらいだった。

何度目かの欠伸を零しながら、涙で薄まった視界越しに、海とは違った青さを眺めていた時、不意に耳に入った音に疑問を抱いた。

ゆっくりと身を起こしながら、聞き間違いではないかと耳を澄ませば、やはり同じ音が聞こえてくる。

興味を引かれるままに船縁に歩み寄ったスペインは、少し離れた先の海上に黒い影を捉えた。

更に確かめるために望遠鏡で覗けば、視覚ともに正体を突き止められ、満面の笑みに変わった。

そして、その足で操舵室に駆け込んだ。

「この先にカモメがおるで！何かあるんとちゃう？」

「え、マジすか？」

「キャプテン、また寄り道？早く帰りましょうよ」

興味津々に目を輝かせる者から、あからさまに面倒そうに呟く者まで、反応は様々だった。

それでも、キャプテンの決定権は絶対で、望遠鏡を指針代わりに差した。

「ええやん、ちよつと行ってみようや！」

すでに向かう気満々のスペインに、どれだけ反対しても逆効果なのを知っているクルー達は、仕方ないと言いたげに、進路をズラしていく。

目視出来る範囲だからこそ、さほど航路から外れているわけもなく、すぐに到達出来た。

岩場に囲まれた場所は、陸地とは言えなかったが、そこには、すでに一隻の船が止まっていた。

「キャプテン、先客がおりまっせ」

「ホンマや」

長く船の上で生活をしていると、たとえ岩場でも陸地が恋しい。

船番だけ残して、颯爽と下に降り立った面々は、ぐるりと辺りを見渡したが、人の気配がなさそうに思う。

「危ないっすよ」

「せめて、安全確保してから突撃して下さいよ」

後ろから口々に文句を飛ばしてくるクルー達に、不服そうに口を尖らせたスペインは、先に停泊していた船に歩み寄っていく。

「そんな冒険にならんやん」

手練れのクルー達は、命令などなくとも二手に分かれると、一方が岩場周辺の偵察に向かい、もう一方は停泊中の船を取り囲んだ。

自分達の船よりも二回り程小さい船は、裂傷などの傷跡が大きく、難破寸前だった。

「うわあ、これはヒデエ」

「まだ新しいみたいやけど、動くんか？」

最初でこそ警戒していたものの、あまりの惨状に、生存確認の方が必要不可欠になる。

ドカドカとデカい足音を立てながら船に上がった面々は、下から見上げた以上に悲惨な状況に、啞然とした。

「生きてるやつおるんか？」

さほど大きくない上に半壊状態では、搜索に掛かる時間もたかが知れているが、死者の数も多い。

「生存者おったら殺すなよ」

血の気の多い連中ばかりだからこそ、一先ずの忠告だけ向けたスペインは、改めて船を調べ始めた。

自国の船でないことは、造船の仕方ですぐに気付けたが、

どこの国のものが分からない。

手掛かりになりそうな物を探している最中、船尾の方を偵察にいったクルー達が、口笛を鳴らすのが聞こえた。

「キャプテン！美人さんがおるで」

半ばかりかいじみた声ではあったが、普段から野郎にばかり囲まれているせいで、喜びもひとしおになっちゃおう。

「マジで〜！」

大喜びで駆け寄った先では、ぐったりと船縁に背を預けたまま項垂れている人物がいた。

そして、取り囲むように立っているクルー達の、茶目つ気な声が続いた。

「男やケドな」

「なんや、男かいな・・・」

期待させんと言いたげに、クルー達に睨みを利かせたスペインは、ゆっくりと腰を屈めていく。

「お〜い、大丈夫か〜？」

浅く呼吸を繰り返している様子に、息があるのは分かるが、自力で動くのは難しそうだった。

抵抗する気力もなさ気な姿に、強引に顎を持ち上げて顔を上げさせたスペインは、クルー達と同じように口笛が出た。

「ほんまや、美人サンやん・・・って、お前、もしかして・・・」

自分達にしか分からない独特の空気感に気付いた途端、敢えて口にするのを控えた。

そして、顎を掴んでいた手を離すと、当然のように言って